

なぜ？

100万社の社長たちは、 「法人会」に入会したのか！

- ・ 経営に差がつく。
- ・ 税の知識が身につく。
- ・ 人脈が広がる。

さらにくわしくはWEBへ

法人会

検索



杉山 豊



浦和法人会青年部会 平成22年公開講演会

父親だからできること

(株)こうゆう(花まるグループ)代表取締役 高濱 正伸氏

6月7日、プリムローズ有朋に於いて青年部会主催の公開講演会が開催されました。講師にお招きしたのは、「花まる学習会」でおなじみの高濱正伸さん。いじめ・不登校・家庭内暴力の問題解決に取り組む第一人者の視点から、力のこもった講演をされました。

●子どもをめぐる事件は、ここから生まれている

家庭内暴力のある家庭は、必ず次のような状態におちいついています。お母さんがいて、子どもがいますが、それぞれが閉じたカプセルの中におり、人を寄せ付けません。で、いるかいないかわからない影の薄いお父さんが、端の方にいます。

三年くらい前でしょうか。十二歳が十二歳を刺すような事件が多過ぎる、日本はいつたいつたなくなってしまったんだということで、日本経済新聞が大特集を組んだことがあります。

一因ではないかと一番大きく取り上げられたのは、父親の存在の希薄ということでした。子どもをめぐる不幸な事件の背景に、必ず、孤立したお母さんがいたという事実からです。

いるかいないかわからない父親になっていませんか？ 自立して、光を浴びて生きていける子どもを育てるために、お父さんに何ができるか、一緒に考えてみましょう。

●妻を「孤母病」にするな！

少し前まで、赤ちゃんは、いろんな人が抱っこして育てる近所中の宝物でした。新米のお母さんは、まわり中からアドバイスを貰い、安心して子どもを育てられる世の中だったんです。

ところが、核家族化が進み、よその子を一回も抱っこしたことのない女の子が、ある日突然母親になる時代になりました。一人っきりで初めての子どもを育てようとしても無理というものです。私は、このように孤立したお母さんの症状を「孤母病」と呼んでいます。

頑張れば褒められたり、励まされたりして、いきいきと弾んだ毎日を送っていた

のに、結婚し、母親になってみると、まるでカプセルに閉じ込められたよう、誰も何も言ってくれません。掃除しても、ご飯を作っても当たり前。「えらいね！」と褒めては貰えないのです。

こういう状態でも女の人は、我慢に我慢を重ねて来ましたが、もう耐えられなくなっています。「お母さんだから、頑張らなくちゃって言われるけど、自分はどう頑張れない」と思っているのです。

それを夫から、「おれは外で働いているんだから、家の事はお前の仕事だろうが！」という目で見られると、もうボンッと爆発します。妻が子育てをする環境が、昔と全然違うということに、夫は意識的であればいけません。

子どもが小さいとき、妻には誰も話し相手がいまません。ようやく日本語をしゃべる相手が帰宅しても、くたびれて帰った夫に、「子どもがどうしたこうした」というような話は取り合ってもらえないとしたら、友達がつくれないうような人だと、子どもに虐待の手を伸ばすまで、あと二歩です。

「孤母病」の症例をあげてみましょう。夫がくつろいで新聞を見ていると、彼女はイラつくのです。で、夫がくつろげないように何か用事を命じてしまったりする。専業主婦で、家事を分担して欲しいなんて、全然思ってもいないのに、です。彼女が欲しいのは、「今晚のおかずは美味しいね！」のひと言なんです。作って当たり前みたいな顔をされたくない、ということです。

妻を「孤母病」にしないために、お父さんたちは知って欲しいと思います。大切なのは、男の論理で打ち返すのではなく、妻の言葉を二度受け止めてから投げ返すキャッチボールにすることなのです。



浦和法人会 青年部会
ごからできるこ
 ループ) 代表取締役 高濱 正



講師プロフィール
 高濱 正伸(たかはま まさのぶ)氏

1959年 熊本県生まれ。東京大学・同大学院修士課程卒業。学生時代から予備校等で受験指導の中で、学力の伸び悩み・人間関係での挫折とひきこもり等の諸問題が、幼児期・児童期の環境と体験に基づいていると確信した。
 1993年 作文・読書・思考力・野外体験を重視した学習教室「花まる学習会」を設立する。また、埼玉県内の医師やカウンセラーとともに、ボランティアの立場から、子どもをめぐるさまざまな問題解決に取り組んでいる。

●六年生になったら、異性について学ばせる

日本ばかりではありません。今、世界中で、男と女が困っています。愛だ、恋だ、でくつくのはいとも簡単ですが、結婚生活は楽屋裏を共にするから、そう甘いものではありません。男と女が全く違う生き物であることが、すぐに露呈します。

男は理詰めで勝負好き、子どもっぽい生き物です。話をすれば、途中経過よりも結論を急ぎます。対して女は、「道端にこんな花が咲いていて……」なんて、どうでもいいようなことを次から次と話したい生き物なんです。

夫は、「女って、何でこんな話まらない話ばかりするんだ?」「とうんざりしているし、妻は、「男って、何で私の話を聞かないんだらう」と、諦めています。長年、現場を見てきて、この夫婦はこれで失敗するんだな、とわかります。

子どもも小学六年生くらいになれば、異性について学ばせたい、私は思っています。誤解しないでください。「男(女)は、自分とは違う種類の生き物なんだ!」ということをや、です。

●外で働く男の姿を子どもに見せる

家庭内暴力を振るう子どもを、立ち直らせた事例です。

お母さんから、お父さんのグチばかり聞かされて育った子どもは、愛するお母さんを困らせるダメな人だと、父親を決め付けてしまいます。ある大工さんの息子もその一例でした。小学生だから、まだ間に合うと判断、「お父さんの仕事をせましよう」ということになりました。

お父さんは、マンションの部屋を一つずつ仕上げていく大工さんです。息子が見ると、次々と、「おい、何々を持って来い!」なんて若い者に命令したりするんですね。「なんだ、家のお父さんって、カッコイイじゃん」。

すっかり見直しちゃったんですね。たったこれだけで、二度と暴力はありませんでした。

●立派な「お母さん像」が育つ手助けをしる

突き詰めれば、「哺乳類は母で育つ」ものだと思います。

だから、子どもの中の「お母さん像」が立派に育つのが一番大事なことです。お父さんは、家事を手伝うなんてことでなく、「お母さん像」が輝けるように手助けして欲しいのです。

トップで活躍している著名人に小さい頃のことを訊いてみると、例外なく「お母さん像」が安定しています。「可愛がってくれましたよ、うちの母親は」という答えが返ってきます。

東大生一〇〇人に訊いたアンケート結果です。いろいろな設問のうち二項目だけ、全員が同じ回答をしました。それは、「母親から勉強しろと一度も言われたことが無い」と、「母親はいつもニコニコしていた」でした。

お母さん自身も、「お母さん像」を大切にしたいのです。どうすればいいのか?、それは簡単。「ごはんですよ」と、子どもに呼びかけるひとことです。

子どもは、「ごはんをつくってくれるお母さんを喜ばせて、ほく今日、幼稚園で先生に褒められたんだよ」と話します。すると料理の手を止めたお母さんが振り返って、「あらあ!よかったね」と喜ぶ。この、「あらあ!」が子どもはうれしんです。

「お母さん像」の中心には、お母さんがつくったごはんがあるんです。